

社会教育委員ニューズレター 第16号

発行 佐賀県社会教育委員連絡協議会
事務局 佐賀県民環境部まなび課内

県社教委連第3回理事会

11月21日、3回目の理事会を県庁で開催しました。

協議事項として、令和4年度佐賀県社会教育委員実践研修会(案)について協議が行われました。令和3年11月末にリニューアルした唐津市のポートレースからつにおいて、子ども達の居場所づくりをテーマとしたトークセッションやグループワークで意見交換することについて承認されました。

また、報告事項として、全国大会の令和4年度広島大会及び令和5年度宮崎大会、九州大会の令和4年度大分大会、令和4年度全国社教連表彰の被表彰者の決定について報告がありました。

九社連運営委員会・理事会

10月6日、大分市で開催されました。

運営委員会の議案として令和3年度長崎大会の収支決算報告、令和4年度大分大会の収支予算案及び同大会の運営並びに令和5年度宮崎大会の開催について協議され、原案どおり承認されました。理事会の議案として令和5年度の役員案と社会教育委員の九州大会及び全国大会の開催順が提案され、承認されました。

全国社会教育委員連合総会

第2回(令和4年10月開催)

○第1号議案 第65回全国社会教育研究大会(宮崎大会)について

開催方法等について、原案のとおり承認されました。

○第2号議案 第66回全国社会教育研究大会(茨城大会)について

て

第3回総会で開催プログラム案を提案する条件で承認されました。

○第3号議案 第67回全国社会教育研究大会の開催地区について東北ブロック(岩手県)で開催することが承認されました。

○第4号議案 理事の退任及び選任について

理事の退任(3名)、それに伴う選任について承認されました

第3回(令和5年3月開催)

○第1号議案 令和5年度の事業計画・予算(案)について

○第2号議案 第65回全国社会教育研究大会(宮崎大会)開催要項案について

令和5年度の宮崎大会は、令和5年11月8日(水)から10日(金)にかけて開催することが承認されました。

○第3号議案 第66回全国社会教育研究大会(茨城大会)開催概要案について

令和6年度は水戸市で令和6年10月23日から25日にかけて開催することが承認されました。

○第4号議案 第67回全国社会

教育研究大会(岩手大会)開催概要案について

令和7年度は盛岡市で令和7年10月29日から31日にかけて開催することが承認されました。

県社教委連実践研修会

1月31日、令和4年度の実践研修会を唐津市の「ポートレースからつ」において開催しました。

上野会長、唐津市ポートレース企業局の櫻庭局長のあいさつの後、「幅広い世代が楽しめる地域のコミュニティ(居場所)づくり」をテーマにトークセッションを行いました。

コーディネーターに山口ひろみ副会長、パネリストに唐津市ポートレース企業局の中村章郎企画宣伝課長、ダンススクールNMPの中野知子代表、九州大学大学院人間環境学研究院の田北雅裕講師をお迎えして、約1時間半にわたってトークセッションを行っていただきました。

その後、子ども達が利用するコミュニティエリアなどを実際に見

学し、トークセッションの発言内容や施設見学の感想などを踏まえて「子ども達の居場所をつくるにはどんなことができるか」などについてグループワークで意見交換を行いました。

その概要は、次のとおりです。

上野会長あいさつ

上野会長から研修会の冒頭に次のとおり挨拶がありました。

みなさん、こんにちは。本日はお集りいただきありがとうございます。ポートルースからつ様には大変ご協力いただき改めてお礼を申し上げます。今日の研修会の参加者は昨年から倍以上に増えており、感染に注意しながら開催するように変化しています。

研修会のテーマは「幅広い世代が楽しめる地域のコミュニティ（居場所）づくり」となっています。子ども達はもとより幅広い世代の方がこの施設を利用していただくと伺っており、どんな可能性や課題があるのかトークセッションで話を聞かせていただけたらと思っています。また、社会教育施設は

公共施設等管理計画のもとで延べ床面積など制限されている中、このような複合施設の可能性も考えていければと思います。

社会はウイズコロナ時代で制約がなくなってきましたが、リモート活用した研修会などが当たり前になってきています。このように私たちも頭を切替えたり、活動の仕方も考えていくような時代になってきていると思います。

この研修会が新たな発想や新たな社会教育活動への一助となることを願って私の挨拶とします。



トークセッション

テーマ 幅広い世代が楽しめる地域のコミュニティ（居場所）づくり

最初に山口副会長から、研修会のテーマの趣旨や進め方などにつ

いて説明がありました。

パネリストの中村章郎さんからは、ポートルース場の中に地域に開かれた場所であるコミュニティエリアなどを整備した経緯などについて紹介されました。

中野知子さんからは、施設を利用してダンススクールの活動について紹介されました。

田北雅裕さんからは、まちづくりの中で家族と子どもを支える活動などについて紹介されました。

それぞれの発言の要旨については、次のとおりです。

（中村）ポートルース場は、施設の老朽化や耐震改修の必要性、インターネット購入に伴う来場者の減少、建替えの場合の解体費用などを検討し、内部改修を行う判断をしました。

その基本方針は、「施設のコンパクト化と安全性の確保」、「施設利用者にやさしいユニバーサルデザイン」の施設、「地域貢献できるような施設」で、人が集う施設、賑わいの場所づくりを目指していくこととしました。

1階のコミュニティエリアは

「公民館の部屋がなかなか利用できない」、「ファミリー層が子どもと屋内で遊ぶ施設がない」などの市民の声を踏まえ地域に開かれた場所を目指し、整備を進めていくことにしました。

委員会には学識経験者や子育て支援活動者などに参加いただき、キッズパーク、ブックカフェ、フードコートなど7つのエリアをつくるようにしました。

学生が夕方や土日に来てブックカフェで勉強するなど地域に開かれた場所、コミュニティの新しい形として出発できたのではないかと考えています。

また、公民館長の会議や小学校の卒業祝賀会など多くの方に利用いただいています。

（中野）イベントホールは公民館などよりは広く、ダンスに必要な鏡も利用でき、子ども達は伸び伸びと活動できています。また、シニアの方も椅子に座ってダンスができるので、気持ちよく使わせていただいています。

コミュニティエリアは、子どもたちが、おじいさんやおばあさん

と一緒に遊びに来たりしていて、幅広い世代のみんなが一緒に集える場になっているのではないかと思います。

(田北) 私は、まちづくりを専門としていますが、その中で家族と子どもを支える研究や活動をしています。

今は、専業主婦世帯よりも共働き世帯が多くなり、子育て等を家族だけで担うのが困難になってきており、家族を地域で支えなくてはならない時代になっています。

家族をプライベートな領域に閉じ込めるのではなく、地域に開いていく必要があります。

時間がないことは家族の生活に悪影響を与えますが、子ども食堂には社会参加の仕組みを考えるヒントがあると言えます。

例えば、食事は時間が1日の中に既に組み込まれており、学習支援活動などのようにわざわざ時間をつくる必要はありません。

子ども食堂は、ボランティアでやっているのですが、食べに行った子どもが食べさせてもらった後に片付けを手伝うことで支援される側

から支援する側になります。

最初は支えられていた人が自分たちでコミュニティ活動をするようになるという機能もあります。

また、まちづくりを考えるときに、「出来ないことは可能性」ということを覚えておけばよいのではないかと思います。出来ないからこそ誰かと手を繋いで一緒に何かができるということです。

私がアドバイスした園庭がない福岡市の保育園では、隣の公園を園庭にして地元の方と一緒に掃除やラジオ体操をしており、コミュニティが広がっています。

もう一つのポイントとして関心を持った人の繋がりで地域のコミュニティを超えることがあります。

公園を作るプロセスを住民に見える化し、参加することにより、出来た後にも愛着が生まれるようになります。

公園の掃除も、高齢者が多い自治会ではできなかったが、公園を楽しむ会という関心のネットワーク（コミュニティ）が生まれました。

また、虐待を受けた子ども達を

家庭で受け入れるための里親の推進もしていますが、子どもが里親家庭の理解を深め、不安を解消するツールが必要とわかり、質問や応援のためのカードキット「TO K E T A」を作りました。

子どもの居場所を作るときには子どもの権利をしっかりと意識しながら子どもがいかに参画しながら一緒に作っていくかということと考えるのも、とても大切だと思います。

他にも、図書館の中に子どもの居場所を作るプロジェクトでは、子どもと一緒に利用のルールなどを考えることで子ども自身が一人の市民になっていく教育的な効果もあります。

(上野) 単身世帯や生活困窮者などは公民館に簡単に行くことが難しいなど、従来の社会教育や公民館活動では取りこぼしていく層が今後かなりの割合で出てくるかもしれないということを気がかりに思っています。

納税者の立場から見たときには、公共施設を有効活用するような議論をもつとする必要があると

思います。高校生はブックカフェを利用していますが、公民館を不要と思っているわけではありません。空間のつくりや機能など若い人が求めているものは何かを考えていかなければなりません。

また、ダンス教室の活動では広いスペースの中で快適な活動ができていました。公共施設管理計画では、延べ床面積を減らすようになっていきますが、唐津市は、ポータル場と組み合わせることにより、子どもの成長や学びにつながる空間を作り出しました。

この施設の利用やシンポジストの活動は、従来の社会教育や公民館活動といったものを見直していく契機になっていくのではないかと思います。(文責 事務局)



アンケートについて

紙のほかQRコード読取による

スマホ等から約50名（回答率50％）の方に回答いただきました。

参加動機では、自身の見識等を

広げ職務に活かしたかった（約38％）が一番多く、次いでトークセッションのテーマに関心があった（約28％）となりました。

トークセッションは、多くの方（約98％）から今後の居場所づくりなどの参考になったとの回答をいただきました。

一方で、グループワークに関しては、時間等の不足で、十分議論できなかった（約30％）という意見がありました。

参加者の方が、目的意識や関心を持って研修に取り組んでおられることをアンケートから読みとることができました。

実践研修会後に記入していただいたアンケートの一部を御紹介します。（構成上、若干字句を変更しています。）

〇トークセッション

・それぞれの立場で話をいただき

これからの居場所づくりの視点が広がった。

・誰でも集まりやすい場所が大切で子どもの目線で景観（デザイン）を考えることが大切だと思った。

・ごちゃ混ぜの居場所というキーワードが印象的だった。

・居場所づくりに興味があり、自分がやれることを模索中で、いろんな情報を収集している。

・子供に関する施策を企画・立案する上で、未来の子ども達の家族形態を考えながら、柔軟な発想を持つことが大切だと感じ、勉強になった。

・田北先生の「できないことは可能性」というのは、まさにその通りだと思います。

〇グループワーク

・それぞれの地域活動が参考になった。開かれた地域の公民館を目指すことが絆も深まると思った。

それを発展させるボランティア力が大切。

・他の市町の取組状況を聞いて自分の町の取組を改めて考える機会になった。

・活発に意見をかわすことができ

た。「コミュニティエリアは吹奏楽の練習などで活用できるのでは」とのアイデアがでた。

・現状の紹介にとどまったが、意欲ある参加者を相互に知ることができて良かった。

・興味のある雰囲気、広い公民館人が寄ってくる公民館があればいいと思った。

〇今後の活動

・いろいろな地区の方々の意見を聞き、同じような問題を抱えていることがわかった。コミュニティエリアを参考に図書館などに取り入れてみたいと思った。

・子どもの居場所づくりのヒントやアイデアを得た。地域で実践できるといい。

・様々な方が交流できるような場所を自分の地区にも作っていききたいと思っています。

・まずは、自分の知識を深めることが一番で、どんなことができるか考えていきたい。

・地域への恩返しのためいろいろんな方面に目を向けていきたい。

〇その他の感想

・もつと田北先生の話を書きたか

たった。

・ポートレースからつに、ゆっくり過ごせる空間や多目的に使えるイベントホールなどがあり驚いた。

豊かな発想と実行力に感心した。

・以前は、老人会と子ども会が行事で交流があった。様々な年代の方が参加し、地域を盛り上げていくための事例があれば参考になると思った。

【シリーズ】わたしの社会教育委員活動（4）

「子ども達の朝ドラ」

唐津市 社会教育委員

花 島 義 博

私が校区の青少年育成協議会の役員を仰せつかりまして数年が経ちますが、先輩方から引き継いでいる朝の挨拶運動を皆様にご紹介します。

私は、毎朝、小学校の正門に立ち、子ども達と挨拶を交わす中、何度声を掛けても無表情だった女の子（3年生）が、今では小さい

声ではありませんが、「おはようございま〜す♪行つてきま〜す♪」と笑顔で挨拶が返つて来るようになりました。私にとってはこの上ないご褒美だと喜んでおります。

いつも時間を聞いてくる子どもがいます。私は腕時計を見せて「何時かな？」と尋ねると、最初は「ん〜」と言うばかりでしたが、最近では時計の見方を覚え、読めるようになりました。褒めて上げると、「やったく〜♪」と校門の坂道を喜んで走つて行きます。この子(2年生)が今日一日、自信たつぷりの学校生活を過ごせるかと思うと嬉しくなります。

私は子ども達を「〇〇ちゃんおはよう〜♪」と出来るだけ名前を呼んで声を掛けるように心がけています。しかし、歳を重ねると段々記憶力が衰え、覚えた名前が出て来なくなり苦笑いすることが度々あります。

特に夏休みくらい長い休みに入りますと、折角覚えた名前が頭から消えてしまい情けなく感じております。日頃から、何とかしなくてはと思います。家に帰ると覚えた名前をデスクカレンダーに「〇〇ち

やん」と書くようにしております。近年はコロナの影響でみんながマスク姿なので、子ども達の顔は見分けが付かず戸惑うばかりです。

しかし、長く続けていると、有難いことに街中で子ども達から「こんにちは♪」と声を掛けられ驚く事が度々あります。これほど私にとって嬉しいものはありません。

挨拶こそが将来、良好な人間関係をつくる「一丁目一番地」だと思つていきます。

私は、数年前から子ども達との朝の会話を書き留めておりますので、一部を紹介します。

- ・お母さんに挨拶しなさいって言われるからと挨拶する素直な1年生
- ・虫がいるから怖いと騒いでいるから行つてみるとトンボでした
- ・「ご飯を炊きすぎた」と遅刻して来た6年生女の子
- ・雨降りに傘を持ってこなくてズブ濡れで心配な子
- ・傘を持っていてもささない子
- ・バス旅行の日・・・1年生に何処に行くのか尋ねると、「ん〜あつちこつち」ですと

「ここに学校を建てて下さい」と坂の下の校門の前で言う1年生・・・暑さで坂道が辛いのだろう

・「今、歯が抜けた」と未だ血がついている歯を見せる男の子

・時計を見せると「ヤバイ」と言つて走つて来た男の子5人組・・・8時5分

・「明日福岡に引越す」と言つて、行きたくないと悲しい顔をする男の子

・「おじちゃん、今日は声がかれてるね」と心配してくれた優しい男の子

・寒いねと声をかけると「今日は大寒だよ」と答えた賢い6年生・・・等々

毎朝、この可愛い子ども達の笑顔と、雨の日も寒い日も車の窓を開けて「ご苦労様で〜す♪」と声を掛けてくださる先生方にも支えられ、朝の時間を楽しんでおります。

私自身の健康に感謝しながら、地域を担う子ども達のために、これからも挨拶運動を兼ね見守り活動を続けて参りたいと思つていきます。

さあ〜今日はどんな子ども達の『朝ドラ』が始まるかと心弾ませ家を出る。



朝の挨拶活動の様子

「文化協会の活動を通じて」

吉野ヶ里町 社会教育委員

井上 馨

私は、長年社交ダンスを続けており、吉野ヶ里町文化協会の社交ダンスサークルに所属しています。令和元年度からは文化協会の会長を仰せつかっております。この会長職は、前会長の急逝に伴い、周囲から頼み込まれ引き受けたことが始まりでした。当初「自分が会長である」という意識は薄かったのですが、コロナ禍で大きな判断を迫られたここ数年の間に、「会長」という責任の重さを感じています。

会長職を引き受けたことに伴い、吉野ヶ里町の社会教育委員としての活動も開始しました。ここでは社会教育の一環である文化協会の活動を通じた社会教育委員活動についてお話しいたします。

文化協会の活動において、大きな割合を占めるのは、やはり『吉野ヶ里町文化祭』です。令和2年・3年と文化祭は中止としましたが、今年度は何とか開催することができました。しかし、まだ新型コロナウイルスの影響は大きく、例年通りの開催だったとは正直言えません。文化協会に所属する会員の方々の年齢層が高いこともあり、高齢の方が多い団体は出場を辞退するなどの影響がありました。そのような状況でしたが、ステージ出演・作品展示ともに、協会員以外の町民の方々や、町内の小中学生、幼稚園児、保育園児の出演・出展などがあり、様々な町民の皆様に関わっていただけたと感じています。

また、今年度は2月5日に鳥栖三養基神埼地区文化団体連絡協議会の『ふれあい合同公演』も開催できました。このような多種多様なサークル、その活動に興味を持った人々、他市町の人々との交流を持つ機会は有意義なものです。加えて、一つの事業を共同で行っていく体験も貴重なもので、いくつになっても喜びが得られます。このような機会をぜひ続けていきたいと思うと同時に、作っていかなければならないと思います。

自分たちで作り上げる活動とともに、文化協会では子どもたちに向けた、『文化教室』も行っています。茶道・川柳・華道・囲碁などの教室を行い、子どもたちにも「文化」に親しんでもらうことで町の文化活動が更に活性化されることを目指しています。

現代は、趣味・嗜好が多様化し公民館・社会教育で行う講座の選定も苦労していると聞きます。私たちの文化協会のサークルについても、すべての人々の関心を満たすことは難しく、旧来のサークル活動内容だけでは人々の興味・関心に応えられないのが現状です。従来からあるサークルへの新規加入者も減少しています。今後は新たな取り組みを考えていかねばならないと強く感じております。

現代の社会教育活動においても同様に、様々な興味・関心、社会状況の変化に対応していく必要があります。同じような苦労を皆さんもお持ちではないでしょうか。

今後は、コロナによって離れてしまった人々をつなぐ、新たな方法を模索していく必要があります。これからも文化活動・社会教育活動を継続的に行っていくためにも、皆様のお知恵を拝借しながら一歩ずつ前進していけたら、と願っております。

教育委員会事務局社会教育係に配属され3年目を迎えた。1年目は、スポーツや文化・教育関係に様々な団体があることや、各団体の趣旨や活動内容について学んだ。2年目は、それぞれの団体の課題や悩みが見えてきたので、課題解決の糸口を団体の方々と一緒に考えることを行った。3年目の今年、社会教育主事の資格取得を目指し、講習を受講することとした。

そもそも「社会教育」とは、「社会教育主事」とは、一体なんなのだろう。「各種団体に助言を行う」とあるが、経験の浅い私が資格を取得したところでそんなことができるのかという疑問を抱いていた。講習の約20日間、現地研修を含め講義を受けた。教育・スポーツ・地域づくり・地域文化・SDGsなどについて、各種専門の講師から講義を受け、無事に社会教育主事・社会教育士のカリキュラム



吉野ヶ里町文化祭の様子

「あいさつで繋ぐ地域住民の輪！」
大町町 主事
岩 永 尚 樹

を修了することができた。

今、社会教育とは何か？と、具体的な回答を示すことができるかと問われると、答えはノーである。学べば学ぶほど、社会教育というもの、形の見えない、捉えどころのない、モヤつとしたもののみまである。

私は、社会教育活動は学校外の時間、仕事以外の時間を用いて行うものが大半を占めると考える。その時間は、「あつたらよい時間」というものであり、「なくてはならない時間」とは言い難いと考える。しかし、間違いなくその「あつたらよい時間」に生まれる、地域・知人とのつながり、コミュニティの構築、活動を通して自分自身が必要とされていることを実感する事、何かを成し遂げたときの達成感。これらを感じ、味わうことが、人生にとってプラスの要素をもたらすものであると考える。

他市町も同じように人口が減少していくなか、高齢化が著しい当町において、各種団体の役員の選任も限られている。役員をお願いしても、地域で活発に活動されている方がいくつもの役員を担って

いただいているのが現状である。

「何も知らない、できない」と、承諾を迷う方もいるが、関わっていただけること自体がその方の強みであると思う。「何かができるから関わる」も必要だと思うが「関わる中で何ができるか」という考えも取り入れながら、人と人のつながりを増やし、団体・個人の活動をサポートし、自立を促し、行政と社会教育団体がうまく連携し「あつたらよい時間」を1人でも多くの方に提供できるよう、社会教育主事・社会教育士として、これからの活動を行っていききたい。



社会教育士研修の様子

「これからのコミュニティスクール」

県 社会教育委員

貞包 浩洋

学校の日常

保護者、地域の方の来校はおよそ学校行事に限られています。特に、四大学校行事といわれる、入学式、体育大会、文化発表会、卒業証書授与式では、多くの来賓を迎え、生徒の活躍ぶりをご覧いただいたり、お祝いの言葉をいただいたりします。このような、大人による承認は子どもたちの大きな励みとなります。

日常の学校にも承認できる場面は多々あります。日々、当たり前のように行われている授業、教科や総合的な学習の時間などでの校外学習、生徒会行事や儀式的行事などです。

社会教育委員会での声から

社会教育委員会はさまざまな立場、役職の方々に構成されています。そこで届けられる声からは、地域ぐるみで学校に関わることで、子どもたちの活躍のようすや活動を通じた健やかな育みが広く地域

に伝わることで地域教育力の効果がみられるという感じます。私は、学校は地域の中心であり、地域の花と考えています。花は水を与え、肥料を与え、手をかけ、願いをかけないと美しく咲かないでしょう。学校内でも保護者の方々と一枚岩となり、子どもという花を大切に育てているところですが、さらに美しく咲く花を目指すならば、地域教育力は欠かせない水であり肥料となります。

コミュニティスクールづくり

世の中は、AIと多様性の時代へと進展しています。そのような社会を強くたくましく生き抜くためにも、多様な価値観を身に付けさせたいものです。また、より多くの大人からの愛情をコップから水があふれるほどに与えたいものです。そのためにはコミュニティスクールの構築は必要不可欠な仕組みとなるでしょう。

学校の特色は、地域性を生かしたそれぞれの教育活動です。私の勤務校、東与賀中学校にも、四大学校行事以外に、学年行事や生徒会行事、総合的な学習の時間における校外学習、さらには小中連携



シチメンソウ環境保全の様子

による児童生徒の合同活動や町行事への参加やボランティア活動などが行われています。そこには、生徒一人一人に個性に応じた出番や役割があります。その出番、役割を地域が地域ぐるみで意図的に承認することができれば、それは素晴らしいコミュニティスクールではないかと考えます。コロナ禍も収束の兆しが見えてきました。社会は「時短」や「働き方改革」といながらも多忙化及び多忙感の削減、減少はなかなか難しいものです。それでも未来ある子どもたちへ少しの負担と時間を意図的愛情に変換していただき、その力がコミュニティスクール創造へと進むことができればと思います。

編集後記

1月の実践研修会はいかがだったでしょうか。研修を見ていて「クロスオーバー」という言葉を思い出しました。みなさんは、何を思い浮かべますか？私は、ロックやジャズなどが混合した音楽（フュージョンとも言います）で、新鮮な感動があったのを覚えています。「クロスオーバー」は、異なる要素がお互いの境界線を越えて交じり合う事。ジャンル、分野、特性などが混じり合うという意味です。

視察したコミュニティエリアもポートレースという公営競技場と社会教育の観点からの発想が出会って多世代の人々が楽しめる居場所として創られたものと言えます。パネリストからも居場所づくりには「子どもと大人が一緒になるごちゃ混ぜの可能性を考えていいのではないか」とアドバイスがありました。

社会教育委員の皆さんも、この研修を機会に地元で、新たな発想で多様なことをクロスさせ、従来

の枠をオーバーすることで活動の幅を広げてみませんか。

佐賀県社会教育委員連絡協議会事務局(佐賀県県民環境部まなび課)

〒840-8570 (住所不要)

TEL 0952 (25) 7313

Fax 0952 (25) 7406

✉ manabi@pref.saga.lg.jp
